様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６７７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１７２４０

研究課題名（和文）家族的ライフイベントの格差構造と連鎖過程の解明に関する社会学的研究

研究課題名（英文）Sociological research on disparity structure and chain process of family life events

研究代表者
林　雄亮（Hayashi, Yusuke）

武蔵大学・社会学部・准教授

研究者番号：３０５３３７８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、社会調査データの計量分析から以下の点を明らかにした。
まず、青少年の性行動における出身背景の効果について検討したところ、父親の階層が高いほど子どもの教育に熱心であり、性行動を抑制する傾向が中学生・高校生で支持された。また母親が専業主婦であると、子どもへの監視の眼として機能するため性行動が抑制されること、兄や姉の存在はロールモデルとなりうるため、性行動が促進されることが明らかになった。
次に、離家についての出身背景の影響について、15歳時の親の不在は女性の離家を妨げるが、母親が高等教育経験があると女性の離家が促進されることがわかった。一方、男性は女性ほど出身背景の影響を受けていなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
大人期への移行過程において経験されるさまざまなライフイベントにおいて、出身背景による格差が存在している。本研究課題の意義は、従来から指摘されていた出身階層が子どもの教育達成や職業達成を規定するというメカニズムを超えて、具体的には彼らの離家の在り方や性行動にも影響を与えていることを明らかにした点にある。
日本社会を対象とした大規模社会調査データを用いた計量的分析を行っているため、今後の変化についてさらなる研究の発展性と他の社会との比較可能性を有していることも特徴である。

研究成果の概要（英文）：In this study, the following points were clarified from the quantitative analysis of survey data.
First, I examined the effects of family background on sexual behavior in adolescence. The results showed that middle and high school students who have their father with high socioeconomic status tends to be restrained the early sexual behavior. Also it was found that if the mother is a full-time housewife, her sons' and daughters' sexual behavior is suppressed because it functions as a monitoring eye for children. However, the presence of older brothers and sisters can be their role models for sexual development process, which promotes younger siblings' sexual behavior.
Second, regarding the influence of family background on children's leaving home, it was found that the absence of parents at the age of 15 prevented women from leaving home. However, the mother's higher education experience promoted women's leaving home. On the other hand, men were less affected by background than women.

研究分野：社会学

キーワード：家族　ライフイベント　社会調査　性行動　青少年

１．研究開始当初の背景

申請者はこれまで、若年層のライフコースにおける不平等とその連鎖過程について研究を行ってきた。そこで得られた知見は、「学歴が低いと正規雇用として働くのが困難で、非正規雇用などの不安定な働き方を選択しなければならず、非正規雇用は貧困に陥りやすい。そして貧困であれば結婚することは難しいばかりか、親もとを離れたくてもそれができない」という若年期における不利の連鎖と蓄積であった。

ここから示唆されるのは、これらのライフイベントが若年期にとどまらず、その後の壮・中年期、高年期のライフイベントにも持続的に影響をもたらすという現象である。そこで本研究では、家族的ライフイベントの格差構造とその連鎖過程に関する社会学的研究を展開する。

家族的ライフイベントとは、個人のさまざまなライフイベントのうち、家族の形成、解体、維持、変化に直結または間接的に寄与する出来事を指す。社会階層・移動研究では進学や就職、離転職などの社会的地位に直結するライフイベントには強い関心が寄せられてきたが、家族的ライフイベントへのアプローチは相対的に少ない。一方で、家族的ライフイベントについては家族社会学や人口学での研究の蓄積があるが、社会階層の影響や格差の生成に関心を持つ研究は少ない。

そこで本研究では、これら２つの研究枠組みを結び付け、具体的に次の２点にアタックする。家族的ライフイベントの階層差の解明と、家族的ライフイベントの連鎖過程の解明である。

２．研究の目的

本研究の目的は、家族的ライフイベントについて、その格差構造と連鎖過程に着目し、大規模縦断データ、履歴データの計量分析によって厳密に分析することである。

社会階層・移動研究では家族的ライフイベントに焦点を置いた研究は少なく、家族社会学、人口学、性科学の分野ではライフイベントの階層性への視点がほとんどない。それぞれの研究枠組みを横断しながら、家族的ライフイベントの格差構造と連鎖過程を明らかにすることで、われわれの社会における地位達成過程では捉えきれないライフコースを通じた格差問題をあぶりだすことを目的としている。

３．研究の方法

研究の主たる方法は、大規模社会調査データを用いた計量分析である。それぞれの研究テーマに最も適していると考えられる調査データを用いるため、具体的には、以下の複数の調査データを用いて分析を行ってきた。

まず、青少年の性行動に関するものは、一般財団法人日本児童教育振興財団内日本性教育協会が実施している「青少年の性行動全国調査」データである。これは 1974 年に第 1 回調査が開始されて以来、約6年ごとに実施されているもので本研究では最新の第8回調査までを用いて、出身階層と性行動の関連等について考察を行った。

次に、社会階層や家族的ライフイベントの情報を詳細に把握できるものとして、1955 年以来 10 年おきに社会学者のグループによって継続的に実施されている「社会階層と社会移動全国調査（SSM 調査）」や、東京大学社会科学研究所が 2007 年より実施しているパネル調査「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査」を用いている。

４．研究成果

本研究の主要な成果は大きく 2 つに区分できる。1 つは青少年の性行動についてのものであり、もう 1 つは離家についてのものである。

まず青少年の性行動については、これまでの日本における先行研究の批判的再検討を行い、所属する研究会のメンバーとともに、主な研究成果として書籍『青少年の性行動はどう変わってきたか――全国調査にみる 40 年間』（ミネルヴァ書房）を刊行した。本書は申請者が代表として 2 年間継続してきた東京大学社会科学研究所 2 次分析研究会での成果をまとめたものであり、申請者は編者を務め、自身も 4 章分（1 章分は共著）を担当執筆した。このうち、青少年の性行動と出身背景との関連を議論した章が、本研究と最も関わりが深いため、その概要を以下に示す。

青少年の性行動へ向けられる眼差しは、それぞれの社会や時代によって異なる。ただし、非行としての性行動、発達としての性行動のいずれの見方においても、家庭環境が青少年の性行動を左右することは多くの先行研究から明らかにされてきた。具体的には、親の教育レベルや社会経済的地位の高さ、子育て・しつけの厳格さ、きょうだい構成、住環境などの要因について検討がなされてきた。

このような家庭環境への着目の背景には、子どもに対する家庭の持つ複数の機能があげられる。親の教育レベルや社会経済的地位の高さ、子育て・しつけの厳格さについては、教育レベルや社会経済的地位が高いほど、また厳しい家庭で育つほど子どもの性行動が抑制されると考えられる。一方、母親の影響については別の見方も存在しており、母親が家にいること（すなわち専業主婦）が子どもの性行動を抑制するという仮説もしばしばみられる。これは、母親が家庭内で子どもを監視できることを想定している。きょうだい構成については、年上のきょう

だいの存在は年下のきょうだい達にとってのロールモデルとなりうるため、年上のきょうだいがいることが性行動を促進する要因になりうる。住環境については、専用の個室を持っていることは、プライベートな空間を保有することで親の監視の眼をかいくぐることが可能であることを意味し、性行動を促進させるのではないかと予想される。

そこで青少年の性行動における家庭環境の影響について、以下の仮説群を設定した。初交経験に対する家庭環境の影響について、父親の階層が高いほど子どもの教育に熱心であり、性行動を抑制する（仮説１）。母親が専業主婦であると子どもへの監視の眼として機能するため、性行動を抑制する（仮説２）。兄や姉の存在はロールモデルとなりうるため、性行動を促進する（仮説３）。専用個室の保有は監視の眼をかいくぐることを可能とするため、性行動を促進する（仮説４）。また、これらの家庭環境の影響が青少年の年齢段階によって変化するかについても確認しよう。すなわち、青少年の発達過程を考えれば、家庭環境の影響は年齢が上がるほど小さくなっていくだろう（仮説５）。

分析の結果、以下のことが明らかになった。仮説１の「父親の階層が高いほど子どもの教育に熱心であり、性行動を抑制する」については中学生・高校生データで一部支持される。ただし階層的地位の測定がそれほど厳密ではないことには注意が必要である。むしろ特筆すべきは父が自営もしくは父が不在であることの効果が強く、これらの場合にホワイトカラーの父を持つ子どもより初交経験が促進されるのである。自営は一見すると親子間で共有される時間や場所が多いように感じられるため、監視効果が働くとも考えられるが想定とは逆の効果が得られている。少なくとも自営の父は中学生・高校生の性行動の監視の眼にはならないことを示唆している。父不在の効果は大きく、父親の存在自体が性行動を抑制させることも明らかになった。

仮説２の「母親が専業主婦であると子どもへの監視の眼として機能するため、性行動を抑制する」については、中学生・高校生データの男女、大学生データの男子において成り立つ。先行研究でも繰り返し指摘されてきたことが再確認できたと言えよう。また専業主婦の監視効果は、より低い年齢段階で発揮されるものである。

仮説３の「兄や姉の存在はロールモデルとなりうるため、性行動を促進する」については、中学生・高校生データで支持される結果となったが、大学生データでは男子でのみその傾向が認められた。中学生・高校生の段階では、年上のきょうだいは発達段階における身近な先行者となりうる。兄や姉の実際の性行動の状況は不明だが、兄や姉が年下のきょうだいの何らかの情報源として機能する可能性を示唆するものである。

仮説４の「専用個室の保有は監視の眼をかいくぐることを可能とするため、性行動を促進する」については、中学生・高校生データでのみ検討されたが、男女ともに支持されている。

最後に仮説５の「家庭環境の影響は年齢が上がるほど小さくなっていく」については、大学生データでのみ検討したが、家庭環境の影響が年齢段階に応じて変化する様子は見られなかった。

次に、離家についての研究成果の概要を記す。日本では離家の遅れが進行し、他のアジアや欧米諸国とは異なり男性より女性の方が離家が遅いという性差にも着目されてきたが、本研究では SSM2015 データ（バージョン 070）を用いて、離家の趨勢と要因についての分析を行った。青年期（15-30 歳）に生起した離家を分析対象とし、高度経済成長期以降（1955 年以降）に離家を経験する世代（1941-90 年出生）に限定して分析を行った結果、得られた主な知見は以下のとおりである。記述的分析によると、男女とも離家経験率は若いコーホートほど低下しており、離家年齢も上昇傾向にある。また最も若い 1981-90 年出生コーホートでは性差は消失し、離家理由の分布についても若い世代ほど性差が小さい。

離家についてのイベントヒストリー分析の結果、本人のライフイベント（進学、就職、結婚経験）は離家を強く促し、男性では進学、女性では結婚が主な要因になっている。男女ともに 15 歳時居住地の人口規模が小さいほど、きょうだい数が多いほど離家しやすい。また長男であることは離家しにくく、長女の有意な効果はないものの、女子のみのきょうだいで育った女性は離家しにくい傾向がある。両親の有意な影響は女性にのみ見られ、15 歳時の親の不在は娘の離家を妨げ、母親が高等教育経験があると離家が促進される。離家理由別の分析では、「入学・進学」を理由とする離家の分析を除いて父親の階層の効果はそれほど強くはなく、むしろ女性における母親不在の離家抑制効果が確認された。

以上のいずれの研究についても、今後の展望として、より精緻な分析が求められる。青少年の性行動については先のような結果が得られたメカニズムについての考察が不可欠であるし、離家の分析については出身背景が離家のタイミングに与える影響が年齢段階によっても異なることを考えなくてはならない。この点において、本研究を通じて新たな問題提起につなげることができたと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①林雄亮、「戦後日本の離家現象—趨勢と離家理由に着目して」、荒牧草平編『2015 年 SSM 調査報告書 2　人口・家族』(2015 年 SSM 調査研究会)、査読無し、pp.45-59、2018.

②Koo, Hearan, Yusuke Hayashi, Dingjun Weng, and Jingqian Bi, “De-industrialization and the Changes in Occupational Structure in Three East Asian Cities” *Development and Society*, 査読有り、45(3), pp.439-465, 2016.

〔学会発表〕（計 11 件）

①林雄亮、「青少年の性はどう変わってきたか—性行動・性意識の消極化と分極化」東京性教育研修セミナー2018、2018.

②林雄亮、「離家の趨勢分析—性差・出身階層・ライフイベントに着目して」第 65 回東北社会学会大会、2018.

③林雄亮、「『青少年の性行動全国調査』の 40 年—性行動・性意識の趨勢」東京大学社会科学研究所二次分析研究会 2017　課題公募型研究　成果報告会、2018.

④Hayashi, Yusuke, "*Poverty Dynamics among Japanese Unmarried Women*," International Convention of Asia Scholars 10, 2017.

⑤Hayashi, Yusuke, "*Family Background, Education, and Adolescent Sexual Behavior in Japan*," The 23rd Congress of the World Association for Sexual Health, 2017.

⑥林雄亮、「青少年の家庭環境・教育と初交経験」東京大学社会科学研究所二次分析研究会 2016 課題公募型研究　成果報告会、2017.

⑦林雄亮、「『青少年の性行動全国調査』にみる若者の性行動・性意識の変化」東京大学社会科学研究所二次分析研究会 2016　課題公募型研究　成果報告会、2017.

⑧Hayashi, Yusuke and Misaki Matano, "*Family background and Adolescent Sexual Behavior in Japan*," The 13th Conference of Asia-Pacific Sociological Association, 2016.

⑨林雄亮、「「草食化」「絶食化」の再検討 —分極化する青少年の性行動」第 17 回性科学セミナー、2016.

⑩林雄亮、「青少年の性行動における家庭環境の影響—生存時間分析によるアプローチ」日本思春期学会、2016.

⑪林雄亮、「青少年の性行動に対する両親の影響」第 63 回東北社会学会大会、2016.

〔図書〕（計 2 件）

①林雄亮（編著）、ミネルヴァ書房、『青少年の性行動はどう変わってきたか—全国調査にみる 40 年間』、2018、269.

②石田浩（編）・大島真夫・苅谷剛彦・有田伸・中澤渉・林雄亮・石田賢示、勁草書房、『格差の連鎖と若者　第１巻　教育とキャリア』、171-193、2017.

６．研究組織

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。